

## 研究ノート

# 英語圏の主要ガイドブックにみる山形県庄内地域に関する記述

－ Lonely Planet 社の“Japan 11<sup>th</sup> edition”を事例として－

松山 薫

## I はじめに

旅行者の観光行動は、旅行先に関するさまざまな情報源によって規定される。近年ではインターネットをはじめ情報源となるメディアは多様化したが、一覧性・網羅性にすぐれ、コンパクトで持ち運びに適するという活字メディアの特長を備えたガイドブックは、今なお旅行者にとって欠かすことのできない存在である。中でも、発行部数の多い海外のメジャーなガイドブックに掲載されている情報は、異文化・異言語圏から来日した旅行者の観光行動を少なからず規定する。特に地方圏では、外客誘致に力を入れている一部の有名観光地を除くと、外国人旅行者が得られる現地の日本語以外の情報が限られるため、それらのガイドブックの掲載内容の構成が、旅行者の行動にかなり影響すると考えられる。

同時に、その内容構成は、外国人旅行者の日本に対する情報需要の一端を示しており、外からみた日本各地の場所イメージを理解する一助ともなりうる。しかし、それが受入地域側の誘客意図や自己イメージと一致しているとは限らない。受入地域側が、外国人旅行者が得ていると思われるそうした情報をあらかじめ把握し、可能な対応を検討しておくことは、外国人旅行者に対する観光サービスの向上にもつながると考えられる。

本稿では、そうした一地方農村部である山形県庄内地域を対象として、英語圏のガイドブックのうち、発行部数が多く、日本における外国人旅行者の行動に与える影響力が大きいと思われる、Lonely Planet 社発行の“Japan 11<sup>th</sup> edition” (Chris Rowthorn et al., 2009; 以下『第11版』と記す)の当該地域の記述の量や内容を分析する。Lonely Planet 社のガイドブックシリーズでは、各章の執筆者名が明記されている。署名記事であるからには、内容の取捨選択や構成には、

各執筆者に大きな裁量が与えられていると考えるのが妥当であろう。結果として、日本国内で発行されている当該地域のガイドブックや観光パンフレットの記述と、構成等の面でかなりの差異がみられる可能性もある。

山形県は2006年の総合発展計画で、当時約2万3千人の外国人観光客を、10年後には倍増する計画を掲げるなど、インバウンド観光の増加を観光政策の柱の一つとしている（山形県、2006）。同様の計画は地方圏の各地で重要視されており、その趨勢のなかで、影響力のある英文ガイドブックによる「外からみた地域」の一側面は、把握しておくべき基礎的事項と思われる。

## II 分析の方法

### 1. Lonely Planet社のガイドブックの特徴

Lonely Planet社のガイドブックシリーズは、創業者であるTonyとMaureenのWheeler夫妻が、新婚時代にヨーロッパからアジアを経てオーストラリアに至る貧乏旅行を敢行し、その旅行記を1973年に自費出版したところから始まる。同社のシリーズは、他社が手を出さない発展途上国や「秘境」といわれる地域も積極的にカバーし、当時急増していたバックパッカーのバイブルとなった（Wheeler and Wheeler, 2005）。

日本に関するガイドブックは、1981年に『第1版』が発行されて以来、2011年8月現在、『第11版』（2009年発行）まで版が重ねられている（なお、本稿執筆中の2011年9月に、『第12版』が発行された。詳細は「追記」を参照いただきたい）。同シリーズはB6変型版で、『第11版』の総頁数は880頁である。

同シリーズのガイドブックの特徴としては、世界で最も出版部数が多いガイドブックの一つであることのほか、広告を掲載しないこと、各章がそれぞれの担当執筆者による署名記事であることなどが知られる。

発行部数の多さに関しては、2006年に発行されたLonely Planet社の本は8千万部におよび、世界で最も売れているガイドブックシリーズといわれている。Lonely Planet社の日本語版を出版している株式会社メディアファクトリーの

ホームページ<sup>1</sup>によれば、「2002年のワールドカップで日本を訪れた大半の外国人ゲストが日本を旅するために使っていた」とのことである。現在同社は、450人の社員と、200人を超す執筆者を抱えているという<sup>2</sup>。

同シリーズの執筆者は、必ず実地踏査を行い、現地在住者や専門家の協力を得ながら情報を更新していく。また、執筆者は、好意的な記事を書くための見返りとして、取材先から無料の宿泊や食事の饗応を受けることはないとされており、この点は各ガイドブックに必ず記載され、ホームページでも強調されている。これは記事の正確さと客観性を保つためとされている。

あわせて、取材先に事前に掲載が予告されることもない。たとえば、岩手県平泉町では、ある3軒の宿泊施設において、急に外国人客の予約が増えたため不思議に思っていたところ、Lonely Planet社のガイドブックにその3軒のみ掲載されているためであることを後から知った。そのうち1軒は少し前に廃業しており、別の英語対応ができない旅館は、日本語を理解しない客を断っていたという（2008年当時。平泉町役場における聞き取りによる）。このように、実際に同書の記述内容は外国人旅行者の行動をある意味で誘導しており、その対応等を含め、地域の観光業界へ何らかの影響をもたらすケースも少なくないと考えられる。

## 2. 『第11版』の構成と分析の方法

『第11版』の全体の章立ては、まず前半に推奨周遊コースや日本の歴史、文化、食、建築など、日本全体をテーマ別に概観するパートをおき、後半に「東京」、「東京近郊」、「本州中部」、「関西」、「本州西部」、「本州の北部」、「北海道」、「四国」、「九州」、「沖縄 南西諸島」の地域別の各章が続く。なお、ここにあげた日本語の章名は英語の章名に併記されているものであり、他にも本文中の主要な地名・固有名詞等には日本語表記が添えられている。

各章の下には、主として都道府県別、または一体的なまとまりをもつ観光地域別に、節が設けられており、節の以下も階層的に段落が構成されているので、

---

<sup>1</sup> 株式会社メディアファクトリー HP 「ロンリープラネットガイドブックについて」。  
<http://www.mediafactory.co.jp/books/lplanet/page02.html#003>, 2011年9月8日閲覧。

<sup>2</sup> <http://www.lonelyplanet.com/about/>, 2011年9月8日閲覧。

ここではそれを便宜的に、章、節、項、目、細目と名付ける。

山形県の観光情報は、「NORTHERN HONSHU 本州の北部」の章に掲載されている。この章の執筆者は、東京在住のフリージャーナリスト／ライターの Matthew D. Firestone である。章の下には、福島、青森、岩手、宮城、秋田、山形、新潟の7県について、各県別に節が設けられている。なお、他地域については必ずしも県別に節立てされているわけではない<sup>3</sup>。

「本州の北部」の章は65頁あり、うち山形県に関しては8.9頁が割かれている。この分量は、この章で扱われている東北6県および新潟県の計7県の中では、上から5番目に位置する。

Lonely Planet社のガイドブックシリーズは、ごく厳選された写真を除くと、ほとんどがテキストによる情報提供であり、この点も特徴の一つである。山形県の項に関しても、全県地図が1頁ある以外は、すべてテキスト情報である。したがって、このテキストの項目別の記述分量を明らかにすることにより、読者にどのような比重で情報提供がなされているかをとらえることができる。ここでは、各項目のテキストの行数を数え、頁数に換算し、記述分量を把握した(同書は1頁110行)。また、記述されている内容の考察を通して、強調項目の傾向を分析し、さらに日本語のガイドブックや、地元山形県観光協会により作成された英文パンフレットの内容との比較を行った。

### Ⅲ 『第11版』における庄内地域に関する記述

#### 1. 「山形県」節の項目別構成

山形県の節の下に設けられている項は、掲載順に、「飛鳥」、「鶴岡」、「出羽三山」、「山形」、「天童」、「蔵王温泉」、「山寺」、「米沢」である。表1に各項のテキスト分量とその割合、図1に各項の分布をテキスト分量とともに示した。

山形県は、村山、置賜、最上、庄内の4地域からなるが、『第11版』の上記

---

<sup>3</sup> たとえば「中部日本」に「愛知県」、「岐阜県」という節は存在せず、「名古屋」、「名古屋近辺」という節立てになっており、岐阜市をはじめとするいくつかの岐阜県内のスポットは「名古屋近辺」の節に含まれているのに対し、同じ岐阜県内でも高山や白川郷など著名な観光地を抱える「飛騨地方」は独立した節になっている。

表1 『第11版』における「山形県」節内各項のテキスト分量およびその割合.

章	節	項【掲載順】	テキスト分量【頁数】	(地域)	テキスト分量【%】
本州の北部	山形県		7.81 *	-	100.0
		リード文 (山形県全体)	0.15	-	2.0
		地図 (山形県全体)	1.00	-	12.8
		飛島	0.41	(庄内)	42.1
		鶴岡	0.99	(庄内)	
		出羽三山	1.88	(庄内)	
		山形	0.75	(村山)	34.8
		天童	0.33	(村山)	
		蔵王温泉	1.23	(村山)	
		山寺	0.41	(村山)	
米沢	0.66	(置賜)	8.4		

\*このテキスト分量は、空白行や余白を含まないので、前述の山形県全体のテキスト分量とは一致しない。

8つの項のうち、「飛島」,  
「鶴岡」,「出羽三山」の3  
項は庄内地域に位置し、最  
上地域のスポットは本版で  
は紹介されていない(表1,  
図1)。

表1によって地域別の頁  
数をみると、「山形県」の節  
の42.1%にあたる3.29頁  
が庄内地域に関する記述で  
あり、さらに県全体のリー  
ド文と全県地図を除くと、  
4地域の記述のうち、実に  
半分が庄内地域に対して割  
かれていることになる。と  
りわけ「出羽三山」につい  
ては2頁近い記述があり、  
これは「山形県」の節に含  
まれる全8項の中で最も記  
述が多い。

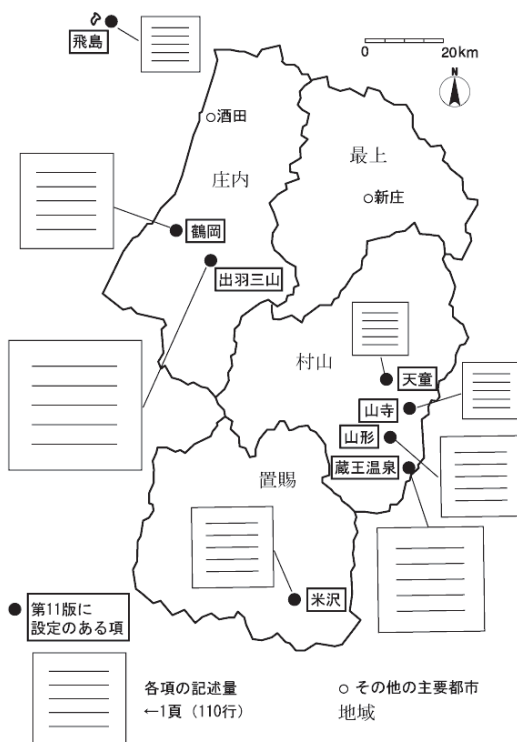


図1 『第11版』の掲載項の分布とテキスト分量.

## 2. 庄内地域の項の内容

個別の項に関して、さらに項の下の目、細目と、それぞれの記述分量、またテキストの中に盛り込まれた固有名詞等を、表2にまとめた。

まず全体構成上注目すべきなのは、表1でみたように、山形県の節の冒頭が、日本海に浮かぶ離島である「飛島」から始まっており<sup>4</sup>、しかもそれに少なからぬ分量（0.41頁）が割かれていることであろう。そのかわり、酒田市（本土側）については、飛島航路の起点および旅行案内所の所在地としてのわずかな記述があるにすぎない。鶴岡市とともに庄内地域の中心都市として並び称される酒田市に関して、山居倉庫など著名な本土側の有名スポットが一切紹介されていない点には、当該地域の観光資源を知るもの目にはやや奇異に映るかもしれないし、3. で後述するように、一般的な日本語の主要なガイドブックや観光パンフレットとも様相を異にする点である。しかし、1冊で日本全体を扱うという海外ガイドブックの性格上、紙幅の制限が大きいのは必然であり、その中でどの項目を重要視して掲載するかという点そのものに、執筆者、ひいてはこのガイドブックシリーズの個性があらわれているとみるべきだろう。

飛島は、酒田市に属する人口265人（2010年3月末）<sup>5</sup>の小さな離島で、基本的に一日一往復（繁忙期は増便）のフェリーで本土側の酒田港と結ばれている。『第11版』は「飛島」を以下のように紹介している（部分）。

You're gonna have to work hard to get out to this tiny island floating in the Sea of Japan, though your reward will be time spent on a lonely landmass defined by rugged sea cliffs and expansive sea caves. Only 8 sq km in size, and home to less than 100 people inhabiting small fishing villages, the nature here is pristine, especially if you're a fan of birdwatching, wilderness beaches and snorkelling (in the summertime only!).

（訳）「日本海に浮かぶこの小さな島にたどり着くのは大変であるが、荒々し

---

<sup>4</sup> この節内の項の配列に関しても、県によってさまざまであり、宮城県、青森県、新潟県のように県庁所在都市から始まっている県もあれば、福島県（冒頭は会津若松）、岩手県（同じく平泉）、秋田県（同じく八幡平）のような例もあり、山形県も後者に属する。

<sup>5</sup> 住民基本台帳に基づく数で、常住人口はさらに少ない。

表2 『第11版』の庄内地域に関する記述.

項目	細目	記述分量 [頁数, ( ) 内は内数]	テキスト中の固有名称など
飛鳥		0.41	
鶴岡		0.99	沢口旅館
	見どころ・体験	(0.27)	兜造り, 鶴岡公園
	致道博物館		五重塔, 龍神信仰, 人面魚
	善賢寺		天神祭 (化け物祭)
	祭・イベント	(0.07)	奈良館, 鶴岡ワシントンホテル, 東京第一ホテル鶴岡, 三味庵
	宿・食	(0.30)	
	その他*	(0.35)	
出羽三山		1.88	
	見どころ・体験	(1.11)	いでは文化記念館, 五重塔, tea house [二の坂茶屋か], 別院, [羽黒山三神] 台祭殿, 齋館
	羽黒山		八合目, 九合目, 月山神社
	月山	(0.21)	湯殿山神社, 湯殿山参籠所
	湯殿山	(0.22)	即身仏
	大日坊・注連寺	(0.26)	八朝祭, 松例祭
	祭・イベント	(0.07)	
	講座	(0.13)	出羽三山神社, いでは文化記念館
	宿・食	(0.23)	齋館, 湯殿山参籠所, 湯殿山ホテル
	その他*	(0.57)	

\* リード文, オリエンテーション, 交通アクセスなど.

[ ] 内は筆者注.

い海食崖と広大な海食洞に特徴づけられる孤島で過ごす時間は、その苦勞に報いるものである。面積わずか8 km<sup>2</sup> [マ]<sup>6</sup>、人口100人足らずの小さな漁村であるが、ここには手つかずの自然があり、特にバードウォッチングや、自然のままのビーチ、シュノーケリングを楽しみたい人には最適である（夏季のみ!）」

続く項の「鶴岡」は、出羽三山訪問への起点都市として、また誇るべき歴史をまちなみに残す旧城下町として紹介されている。記述分量は1頁弱で、「致道博物館」と「善寶寺」の細目をもつ。

「致道博物館」の細目では、かつて庄内藩主であった酒井家によって、庄内の文化の保存と発展のために、鶴岡公園の一角に建てられた博物館であることが述べられ、敷地内の兜造りの農家（“a farmhouse with a thatched roof shaped like a samurai helmet”，田麦俣から移築された多層民家を指している）等にも言及している。

また、「善寶寺」は、五重塔や大きな山門をもつ禅寺で、海の守護神である龍神を祀っているほか、「有名な人面魚」が見られる場所として紹介されている。「人面魚」とは、善寶寺の貝喰みの池に住む鯉の一部のことで、これが人間の顔に見える模様をしているとして、1990年に写真週刊誌に掲載されたことをきっかけに、人間の顔に見える動物（「人面犬」等）が一種の全国的ブームとなった。善寶寺には、当時、人面魚を見るための観光バスが連なったという。人面魚の記事は、1997年発行の『第6版』に『第11版』と同様の記述が初めてみられ、その後「本州の北部」の署名執筆者は少なくとも4回変わっているにもかかわらず、脈々と人面魚の記事は受け継がれている。

「山形」の節全体の中で、最も記述量の多い「出羽三山」の項では、リード文で、出羽三山が羽黒山、月山、湯殿山という三座の聖なる山の総称であること、山伏および修験道の信者により何世紀も崇められてきたことが説明され、そこで見ることのできる人々の姿が次のように描かれる。

During the annual pilgrimage seasons, you can see white-clad pilgrims equipped with

---

<sup>6</sup> 実際の面積は2.7km<sup>2</sup>である。また、地図上の飛島の位置も、実際より大幅に南に描かれている。



wooden staff, sandals and straw hat, and fleece-clad hikers equipped with poles, trekking boots and bandana. /Of course, it is the yamabushi, with their unmistakable conch shells, checked jackets and voluminous pantaloons, that keep the tradition alive.

(訳)「毎年の巡礼の季節ともなると、白装束で身を固め、木の杖を持ち、草鞋、菅笠姿の巡礼者と、フリースで身を固め、トレッキングポールを持ち、トレッキングブーツにバンダナ姿のハイカーを見ることができる。/もちろん、法螺貝、チェック柄のジャケット、ポリウムのあるパンタロンという見まがいよのない出立ちで、生きた伝統を体現している山伏も。」

巡礼者や山伏の装束について、それぞれの正式名称等にふれるほど立ち入った説明ではなくても、特徴をとらえた描写で、その独特な姿は容易に想像できよう。

そののち、三山それぞれについてアクセスや休憩所、参拝の方法などについて解説がある。続く大日坊と注連寺の細目では、即身仏について、そもそも即身仏とはなにか、またその外観や由来などについて説明している。

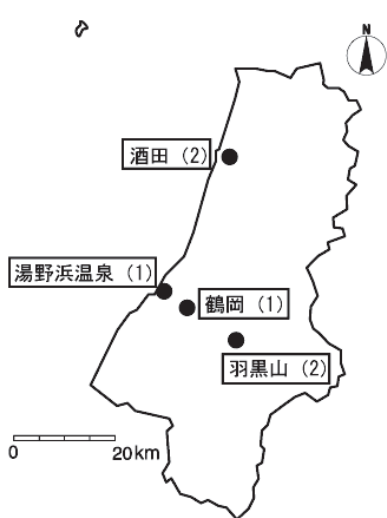
さらには、「ここまでで、あまり気をひかれるものがなければ、『山伏になる』ことを考えてみては」と提案し、その方法として、二つの施設が提供する「修行」コースを紹介する。一つは、「出羽三山神社」で「本物」の山伏になるというものである。「このコースはこの上なく厳しく、覚悟が弱い人向きではない。日本語が相当使いこなせて、十分な時間とお金を費やせる人にもみふさわしい」とほとんどの読者の腰が引けるような記述をしておきながら、電話連絡先は律儀に掲載している。もう一つの選択肢としては、「修行体験」ができれば十分という人向きと称して、「いでは文化記念館」が主催する山伏修行体験コースを紹介している。

「出羽三山」の項の中の細目「羽黒山」、「月山」、「湯殿山」、「大日坊・注連寺」は、筆者が遡って確認し得た限りでは、1986年の『第2版』にすでに存在しているが、現在の執筆者になってから明らかにこの項に記述の力点が置かれている感がある。前述のリード文や、山伏修行の勧めなどの内容が追加され、全体的に詳細かつ生き活きとした筆致になっている。『第11版』に掲載されている、

この部分の執筆者 Firestone のプロフィールをみると、人類学と疫病学を学んだとあり、もしかするとそうした執筆者の学識と嗜好が反映されているのかもしれない。

### 3. 日本語ガイドブックおよび山形県観光協会発行英語パンフレットとの比較

『第11版』で取り上げられている各項目を、日本で最も発行部数の多いガイドブックシリーズの一つである、JTBパブリッシング社の『るるぶ東北 '12』（2011、日本語）と、山形県観光協会が発行している英文パンフレット“YAMAGATA GUIDEBOOK”（Yamagata Tourism Information et al., 2011）の2つの資料と比較する。Lonely Planet社の『第11版』は日本全国を1冊で扱っており、日本語のこのようなガイドブックを探すとすると、広くても『るるぶ東北』のように「地方」レベルのスケールが最大となる。それでも東北6県という広域を扱うゆえに、それぞれの地域の観光資源として掲載されている内容は、『第11版』と同様に厳選された結果とみなしてよいだろう。



( ) 内は頁数

図2 『るるぶ東北 '12』（2011年発行）の庄内地域に関する掲載項目。

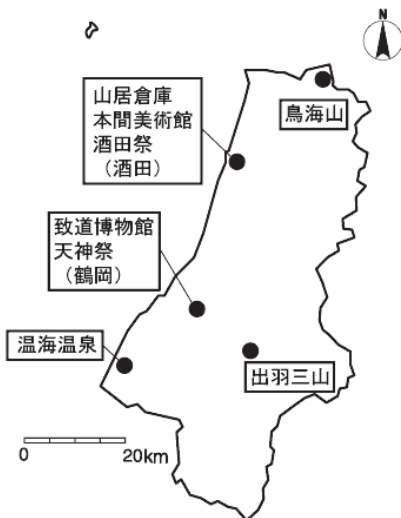


図3 “YAMAGATA GUIDEBOOK”（2011年発行）の庄内地域に関する掲載項目。

一方の“YAMAGATA GUIDEBOOK”は、実質的には山形県によるオフィシャルガイドブックであり、地元自治体が外国人旅行者に何をアピールしたいと考えているかを表象している。

『るぶ東北'12』では、実質的に山形県を扱っている頁数は22.5頁、“YAMAGATA GUIDEBOOK”は総頁数16頁のパンフレットであるが、どちらも写真（不定形のものを含む）の占める比重がかなり大きいので、厳密なテキスト分量の計測は行わなかった。前者はそれぞれの項目が占有している頁数を併記し、後者はそもそもテキスト分量が少ないため、記述があればそれぞれ地図上にプロットした（図2、図3）。

いずれのガイド資料も、都市志向と自然志向の項目、また都市に関しては酒田と鶴岡の項目バランスがほぼ均等である点において、Lonely Planet社の『第11版』とは大きく異なっていることが、前掲の図1と比較してもよくわかる。いいかえれば、『第11版』の掲載項目は、自然志向もしくは民俗志向の偏りをみせているといえるだろう。「致道博物館」や「出羽三山」のように、共通する項目もあるが、飛鳥、人面魚、即身仏、山伏体験のすすめのように、日本語の広域的なガイドブックや、地元の公式英文観光パンフレットではほとんど表象されないような項目が、世界シェア1位とされる英文ガイドブックに掲載され続けている事実も、もっと知られていてもよいのではないか。

#### IV おわりに

ガイドブック、特に外国旅行用のそれは、携帯に耐えうようにボリュームを抑える必要があり、当然紙幅の制限が厳しい。そうした中で、掲載項目をどう取舍選択するかは、執筆者や編集者の地域観や専門性等にかかってくる。それは時にホスト国／地域の地域観やアピールポイントとは若干異なるかたちで表象される。本稿では、世界的に高いシェアをもつ英文ガイドブックによる、山形県庄内地域という一地方の記述を通して、そのことを明らかにした。このように、影響力の大きい海外のガイドブックによる当該地域の記述を意識することは、インバウンド観光を議論するうえで必要な一視点であり、同時に自地域を相対的・俯瞰的に認識する機会でもあると考える。

## 文献

山形県 (2006) 『山形総合発展計画 子ども夢未来宣言 全県計画 長期構想』.  
(2011) 『るるぶ 東北 '12』 JTBパブリッシング.

Chris Rowthorn, Andrew Bender, Matthew D. Firestone, Timothy N. Hornyak,  
Benedict Walker, Paul Warham and Wendy Yanagihara (2009) Japan 11th edition.  
Lonely Planet Publications Pty Ltd.

Tony Wheeler and Maureen Wheeler (2005) Once While Travelling : The Lonely  
Planet Story, Penguin Viking.

Yamagata Tourism Information Center, Yamagata Prefecture Tourism Promotion  
Division and Tourism Information Center (2011) YAMAGATA GUIDEBOOK :  
Welcome to Yamagata.

**追記** 本稿執筆中の2011年9月に、Lonely Planet社のガイドブック“Japan  
12<sup>th</sup> edition”が発行された。この版では、「山形県」の節の中から、「飛鳥」の  
項が削除された。また、2011年3月11日の東日本大震災の発生とその被害  
状況を受けて、「福島県」、「宮城県」、「岩手県」は節全体が削除されている。